The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	シカゴ学派の盛衰-社会情勢的背景との関連からみた初期シカゴ学派の成立から衰退まで-
Author(s)	玉井, 眞理子
Citation	大阪大学教育学年報. 2001, 6, p. 53-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12402
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学教育学年報 第6号（2001年）
Annals of Educational Studies Vol.6

シカゴ学派の盛衰

—社会情勢的背景との関連からみた初期シカゴ学派の成立から衰退まで—

玉　井　眞理子

【要旨】

初期シカゴ学派の盛衰を時代の流れに照らしてみると、社会学的方法論上の視座は、社会情勢と密接に関係していることがわかる。この学派が主に用いた方法は、スペンサーの理論に基づくアメリカ政府の自由放任政策（これはとりわけ巨富を手にし、一層多くの資本を得ようとする企業家たちの営為に正当性を与えるイデオロギーとして作用した）のもとで生じた急激な産業化がもたらす問題を解決しようとする目的を持つ人々が、この理論に対抗し、それでは見逃されてしまいがちな市井の人々や社会的マイノリティがおかれた生活実態を、彼/彼女らに接近して明らかにしようとするものである。このスタンスの基礎は第一世代のスモールによって築かれ、『ジャック・ローラー』を初めとする第三世代のモノグラフに結実するが、社会状況の変化（すなわち愛国主義の強まりや第一次大戦への参加など）が、この学派の衰退を招いたとみることができる。

1　はじめに

学問領域においていかなる方法が重要とされるのかという問題は、社会情勢と無関係ではない[1)]。ある科学的方法が優れているとみなされていたにもかかわらず、その方法がかえりみられなくなり、その後再び脚光を浴びるようになるのはいったいなぜなのであろうか。このような事象が歴史上、とりわけ明白にみられたのはアメリカの社会学においてであった。方法論上の急激な転換がアメリカ社会学において生じた。

シカゴ学派は19世紀末に社会学をアメリカで初めて制度化し、その研究スタッフは後の世代の研究者育成に力を注いだ。この学派のアメリカ社会学における地位が築かれ、後に「シカゴスタイル」と呼ばれる社会学的方法が確立され、数多くの優れたモノグラフやエスノグラフィーが産出された。にもかかわらずその名声は過去のものとなり、一時はこの学派が用いた方法がほとんど無視され、それと時を同じくして、方法論的には全く異なる、普遍性や抽象化を重んずる構造＝機能主義がアメリカ社会学の首座につく[2)]。しかしその後再びシカゴ学派が評価され、注目されるにいたっている。

本論文では特に初期シカゴ学派に注目し、彼/彼女らが用いた社会学的方法が成立し、やがて衰退してゆくまでの経緯の背後に存在する要因を時代の流れの中でとらえ、とりわけそこにひそむ社会的背景を明らかにすることを目的とする。

2　シカゴ学派の特徴

シカゴ学派の社会学的方法の特徴は、市井の人々の観点に接近し、社会の内部から具体的な社会的現実を明らかにしようとするものである。そのためにフィールドワークによる観察を重視し、また資料としては生活史、手紙、手記などを用いながら、個人の視座に映る社会の現実を明らかにしつつ、一方ではその個人が置かれた状況を、統計や地図などを用いて社会全体のなかに位置づけた。このとき個人の、そして時には社会的弱者—＜移民や非行少年や浮浪者など＞—の「主観」的現実が重視された。アメリカの急激な都市化の時代にあって、市井の人々にとっての社会変動の現実はいったいいかなるものであるのか、この点に重点をおいたのがシカゴ学派の社会学的方法である。この方法による研究業績の数々は、変動する社会の中で生じている事態が直接に結びついている時間的・空間的脈絡を出来る限り包括的に提示しよう

とするものであり、この点がシカゴ学派の方法の魅力なのである。さらにシカゴ学派の社会学者のなかには、都市化や産業化が個人にもたらす問題が何であるかを明らかにするのみならず、その解決のための方策を示そうとする者もいた。当時シカゴには、貧困者や「逸脱者」が数多くいたのであるが、彼らはそうした人々の存在を社会問題として位置づけ、さらに社会学を通してそうした人々がかかえる問題の解決にあたろうと考えたのである。この立場から研究をすすめた人物として、アルビオン・スモール、アーネスト・バージェス、クリフォード・ショウらの名を挙げることができる。彼らは初期シカゴ学派の第一、第二、第三世代をそれぞれ代表する社会学者である。

3 シカゴ学派前史

シカゴ学派はなぜ市井の人々の観点から社会をとらえようとしたのであろうか。この点を考察するにあたり、まずはさらに時代をさかのぼり、この学派が成立する以前の社会状況をふまえておく必要がある。結論から先に述べるならば、その成立には、社会的弱者がおかれた現実を明らかにしようとした宗教者たちの闘争がかかっており、その結果としてシカゴ学派の視座やスタンスが、市井の人々の立場からの社会問題解決を志向するものとして特徴をあらわしてきたのである。そうした意味においてこの闘争は、後に詳しくみるように、アメリカの「金ぴか時代」を擁護する上で有効であった抽象理論に抗する闘争であった。

・スペンサーのアメリカ社会に対する影響

ここで、スペンサーがアメリカ社会に及ぼした影響に注目しておきたい。というのも、スペンサーの理論はアメリカでなくイギリスで生まれたものであったが、この理論がアメリカ社会に与えた影響力は非常に大きく[3]、シカゴ学派の成立をみる上で見逃すことはできないからである。

スペンサーの理論は、経済政策における自由放任を進化思想にもとづいて擁護するものであった。スペンサーはダーウィンの『種の起源』(1859) に先立ち、1851年の『社会平権論』(Social Statics) において、進化の観念を人間社会の諸領域に適用した。そしてダーウィンの進化論がこれに科学的な保証を与えたのである。このように両者は一括りにして論じられることが多く、スペンサーの思想は「社会ダーウィニズム」と呼ばれている[4]。

スペンサーは国家の機能について、自然淘汰の法則の働きを妨げぬようにするために、産業を規制することも、貧民を救済することも、公衆衛生を管理することも否定した。さらには国家が子どもに教育を与えることさえ否定する立場をとるほどに、国家の干渉に反対し、自由放任を強く主張した。

こうしたスペンサーの理論は、急激な産業化が生じていた19世紀のアメリカ（それは人々がかつて経験したことのない状況や新しい価値観への適応に迫られていた時代であった）にすぐさま取り入れられた。つまり彼の理論は、当時のある特定集団のニーズに合致するものだったのであり、とりわけそれは巨富を手にし、さらには一層多くの資本を得ようとする企業家たちの営為に正当性を与えるイデオロギーとして作用した。というのも、資本家が暴利をむさぼろうとする姿勢で社会に向かい、経済競争における勝利を追求する態度を、進化思想の適者生存の論理は後押しするものであったからだ。スペンサーの言葉でいうなら、経済競争の勝者は「最適者の生き残り」(survival of the fittest)（ホーフスタッター 1944 訳書48頁 清水 36頁）であるとされる。これは自然淘汰の帰結をあらわす観念である。そして貧困は怠惰、無気力などがもたらした結果であると、個人の責任に帰するとされたのである。

この考えは「自由競争」の名のもとに、そもそも生まれながらにして不利益を被っていたり、決して勝者になれない境遇におかれている人々の「淘汰」を是認する。「競争に参加するまえにふるい落とされている人々が存在することへの視点を、この考えは欠いている。この場合の「競争」のルールは社会的強者によってつくられているのであり、それゆえ強者にとって都合のよいものとなっている。仮に全ての人々が「生き残り」をかけて「競争」に参加しなければならないとするなら、国家には社会的弱者が競争に参加する上での足かせを取り払うことが求められるが、この課題が無視されることによって、さまざまな不

平等がもたらされる。スペンサーは平等な自由を前提にしているけれども、国家のさまざまな「干渉」によって社会的弱者に課せられた障害を取り去ることによって初めて、社会的弱者はその自由を手にすることができよう。

しかし現実に、アメリカ政府はスペンサーの社会ダーウィニズム思想のもと、資本主義の急激な進展を放任したのである。その進展はまさに飛躍的であった。科学技術の発明がそれにいっそう拍車をかけた。ではその変化の規模はいかなるものであったのだろうか。この点を知る一つの手がかりとして、人口（その増加には労働力としての移民の流入が大きく影響している）、鉄道の長さ、鉄鋼生産高の変化を、エジソンが白熱電球を発明した1880年と大恐慌の翌年の1930年とを比較してみてみることにしよう。これをあらわしたのが表１[5]である。

＜表１＞

	1880頃	1930年
人口	五千万	一億二千万超
鉄道の長さ	九万三千マイル	二五万マイル
鉄鋼生産高	一二五万トン	五千万トン

・宗教者たちの社会改革運動

アメリカ政府の「自由放任」は企業や投資家の利益をもたらしたが、市井の人々の生活にはさまざまな矛盾をきたすことになった。マーク・トゥエインは1873年にこの時代を「金ぴか時代」と呼んだが、この言葉には、真鍮の上に一枚の金メッキが塗られただけで金ぴかに見えているにすぎないという皮肉が込められていた。むろん社会問題の解決が政府主導で行われることはなかった。しかし無統制の状態でアメリカに渡ってくる大量の移民たち[6]の貧困、都市中心部のスラム化、また議員を買収したり、労働者を搾取する悪徳資本家の問題は、早急に解決されなければならないものとして人々の目に明らかであった。

また資本家による「別のかたちの奴隷制」を人々は危惧した。アメリカのある最高裁判所判事は、当時の人々の心性を次のように記している。

「1890年ころのわが国の事情を想起するものは誰も、その当時人々のあいだには深い不安の気持ちが広くびまんしていたことを記憶しているだろう。わが国は人間の奴隷を廃止した。しかし今や別のかたちで奴隷制の危機に直面しているということを、否定できないのである。すなわち、その奴隷制とは、少数の手に資本が集中せられ、その少数者は彼等自身だけの利益のために、生活必需品の生産販売もふくめて、国の経済活動全体を支配するようになる、ということからおこるのである」[7]。

さて、このような人々が社会を憂慮する声に答え、産業化がもたらすさまざまな問題の解決のために立ち上がったのがプロテスタントの牧師である。産業化をむかえるまでは、アメリカ国民のほとんどが農民であり、彼/彼女らの形成する地域社会においては、プロテスタンティズムに培われた伝統的な慣習やモラルが基盤となって、人と人との間に強い紐帯が成立していた。しかし、その後とりわけ都市化の進んだ地域の住民は、このような地域共同体の急速な解体に直面させられる。こうした事態を牧師たちは放っておくわけにはいかなかった。また地域住民の側も社会改革運動の指導者を求めており、牧師たちはまさにその適任者であった。

アメリカにおける社会学とは、こうした社会改革に向かった牧師たちによって進められた学問なのである。牧師たちは改革のために社会的現実を知る必要があり、その知識を新しい科学として確立することを目指した。1870年代に始まった「社会福音」（social gospel）運動は、多くの宗教者をひきつけ、1880年代には社会学の展開をみるに至る。より具体的にみていくと、例えばこの運動に触発されて、宗教者は慈善・人種・労働者階級・移民について議論した。「監督教会会議」（1874年に創設）や「今日の諸問題を討議するためのバプティスト会議」（1882年に最初の会合）、「超教派会議」（1885）、「『合州国福音主義同盟』

が主催する会議」(1887に最初の会合) は、宗教者たちが行った社会問題についての会議である。

このように宗教者たちの社会改革をめざす動きはさまざまになされたが、そのなかでもシャートクァ運動は、広く全国的に名声を博するほどに影響力を持ったものとして注目される。この運動は社会改革を志す数多くの牧師と学識者との集結をもたらした。そこでは労働問題や社会問題、入門社会学、社会主義、貨幣についての講義がなされたが、講演者のなかにはシカゴ大学社会学部の第一世代とされるヘンダーソン、ヴィンセント、ゼヴリンらが含まれている。この運動の大きな特色の一つは、その推進者たちの多くが「社会学」という学問に期待を寄せ、来るべき時代は「社会学の時代」であると意識していた点であった[8)]。

ジェーン・アダムズもまた、シャートクァで講演した者の一人である。シカゴ学派に強い影響を及ぼした人物として彼女の存在を見逃すことは出来ない。1889年9月、シカゴのスラムの一つ (そこは住民のほとんどを移民が占め、人種の数は50に及ぶ地域であった) に、いわば「自由競争の敗者を救済する城塞」としてのハルハウス (Hull House) が、彼女とその友人のスターによって創設され、セツルメント事業が開始された。セツルメントとは、アダムズによれば「社会的に傷つけられた人々に保証を与えるのみならず、そうした保証の実現を求める起動力がが絶えず更新されるような場」であった[9)]。ハルハウスはまた、宗教者や社会改革者が社会問題について自由に討議する場を提供した。さらに彼女らによってまとめられた「ハルハウス付近の地図と状況」(1895) のマッピングの手法は、シカゴ学派の社会調査において重視されたものである。

4 シカゴ学派の成立

アメリカで初めての社会学の学部と大学院を持ったシカゴ大学の開校は、1892年10月であった。開校に先立つ1890年にこの大学はバプティストによって計画されたのであるが、学長にはシャートクァの副学長の地位にあったハーパーが選任された。彼は社会学科を設立するにあたって、社会問題解決に向けて社会学を応用しようとしていた。

まずハーパーは、バプティスト・カレッジであるコルビー大学総長のスモールを社会学科の主任として迎えた。ついでバプティストの知人を介して知った牧師のヘンダーソンを社会学科の教授陣の一人に加えた。その二年後に、ノースウエスタン大学セツルメントを創設したゼヴリンがハーパーの指名によって教授陣に加わった。このようにハーパーに使命を受けたかれらはいずれも宗教的背景を持っていた。そして彼らは、キリスト教倫理に根ざした立場からの社会改革を目指した。例えばヘンダーソンは幅広く活動を行ない、刑務所改善、児童委員会、社会保険、さらにはシカゴ大学セツルメントの委員を務めた。ゼヴリンは1889年にノースウエスタン大学においてセツルメントを創設していた。

シカゴ大学社会学科の最初の卒業生で研究スタッフに加わり、第一世代の一員とされるのは、ヴィンセントとトーマスである。ヴィンセントはシャートクァの開設者の息子であり、後にシャートクァの教育システムの副総長を務めた。1896年にヴィンセントと同期でスタッフとなったトーマスは、第一世代のなかで最も宗教色が少ないものの、セツルメント運動を支持し、アダムズとの親交も深かった。

ところで、アメリカにおけるスペンサーの後継者は、イエール大学のサムナーである[10)]。彼の説いた思想は社会進化思想であり、かれの立場を表現する際しばしば「レッセフェール保守主義」という言葉が使われる。巨大な政府、労働運動を非難したサムナーは、シカゴ大学が設立される20年も前の1872年、イエール大学でアメリカで初めての社会学講義を行なった。このときのテキストは、スペンサーの『社会学の研究』(The Study of Sociology) であった。このサムナーの思想に対抗したのは、レスター・ウォードである。彼の『動学的社会学』(1883)はサムナーに対する最初の攻撃書とされている。スモールはウォードの弟子であることを自認していた[11)]。スモールの社会学的貢献の一つは、周知のように、アメリカで初めての社会学専門誌AJS (American Journal of Sociology) を1895年に創刊し、彼が引退する1935年まで編集の任にあたったことであるが、この雑誌にはウォードの論文を数多く掲載し、その理論を広く人々に紹介した。

むろんスモール自身、スペンサーの理論を強く否定した。シカゴ学派の基礎を築いたスモールが身を費やしたことの一つは、進化思想、より厳密にいうならスペンサーの理論を否定する戦いであったということができる。スモールはヴィンセントと共に1894年、「社会学の初心者へのマニュアル」と彼らが称するテキスト『社会研究に向けての序論』(An Introduction to the Study of Society) を出版したが、彼らはそこで「スペンサーの社会学は、社会学がまさに始まるべきその場所で終わっているのだ」と断じた。さらに続けて「次のことは事実である。すなわち、社会的事実についてのスペンサー氏の解釈は、社会学の研究領域を、彼の静態的あるいは倫理的理論において、ひとつの下書きにもとづき、完全な社会が発展したときそれが一体どのようなものであるのか、そしてそれまでの経緯はどうであるのかの描写へと還元するものに過ぎない。彼の学説には、理論および活動家の実践にとって有用なものは、受動的な社会ダイナミクスのほかに何もない。そのような社会学が人類の進歩に何ら直接の影響力を持たないのは、まさに海にそよぐ波の調査によっては船の速さを知り得ないのと同じである」と述べた[12)]。

またスモールは以下のようにスペンサー批判を展開している。「氏の社会学は過去のものであって、現代のものではない。スペンサー社会学の原理は生物学の原理を社会関係にまで広めたものと考えられる。しかし社会関係における決定要因は、今日の社会学者たちからは、精神的なものであって、生物学的なものではないと理解されている」[13)]。

シカゴ学派の方向付けにおいて指導力を発揮したスモールが提唱したことのなかでもとりわけ重要なのは、ダーウィニズムの原理を転用した抽象理論（これは社会的強者にとって都合の良い理論であったが）の否定であり、方法論においては、そうした理論では見逃されてしまいがちな市井の人々や社会的弱者がおかれた生活実態を、彼/彼女らに接近して明らかにしようということである。スモールら第一世代の問題意識は、社会学という学問を深めることにより、都市に生ずる貧困やスラム化といった社会問題に対処する「社会改良」をめざすものであった。スモールとヴィンセントは先のテキストでこう明言する。「社会学は社会を改良しようとする近代の意気込みから生まれたのである」[14)]。またスモールは次のように述べて、社会学者の役割が社会改良にあるとする。「社会学者は、社会改良や社会改善に向けての計画や方策を完全なものとし、適用する仕事に積極的に参加することを主張することによって、彼/彼女らの学者としての地位と市民としての地位との両方を高めることができるだろう」[15)]。

5 シカゴ学派の興隆

こうした背景をもとにしてシカゴ学派はその第一世代より、書斎での理論化よりも実際的な調査研究を推奨した。第二世代を代表するパークやバージェスは、スモールよりも一層「科学」としての社会学を意識するようになったが、いずれもシカゴを調査活動の対象とし、当時都市で実際に生じていた現実を社会の内部からとらえようとしたし、また学生をシカゴに向かわせて研究させた。パークはスモールと同様に、都市を「実験室」とみなしたが、これは、この学派の姿勢を示す象徴的なメタファーである[16)]。「信頼できる社会学の方法は、観察と帰納の方法でなければならない」[17)] と第一世代が学徒に向けて主張した方法論上の姿勢は、そのまま次世代に継承された。パークとバージェスが書いたテキストをみると、彼らもまた観察と帰納の方法を重視した指導を学生たちに行なっていたことがわかる。彼らはいう。「社会学を研究する学生にとってまず第一に必要なことは、観察すること、そして自らが観察したことを記録することである。すなわち目にしたことを読みとり、その上で、読みの結果得られた素材を選びわけ、記録することである。それはいうなれば、自らの経験を体系化し、利用することである」と[18)]。

バージェスとは異なり、パークには宗教的背景はなかったが、新聞記者の経歴を持つパークはいわば「現場主義」の立場をとっており、第一世代と方法論的に一致がみられた。彼が新聞に関心を持ったのも、「実際に事実を手にしている記者の方がより有能な改革者である」と発見したからであった[19)]。

パーク、バージェスの指導をうけた第三世代の数多くのモノグラフにおいて、この研究スタイルは結実した。このスタイルによる研究は、時間と空間の文脈性のうちに規定される人々の行為や関係のあり方、そしてその変化の経緯の「現実」を浮かび上がらせる。

このなかでもシカゴスタイルを代表するモノグラフとして、クリフォード・ショウの『ジャック・ローラー』(1930) を挙げることができる。というのも観察と帰納の方法が効果的に実践されているだけでなく、研究そのものが社会改良に直接結びついているからだ。ショウの生活史法は非常に入念で厳密である。この研究においてショウは次のことを行なった。まず保護観察官として非行少年たちと関わり、インタビューを行なった。次にそれをもとにして作成した少年たち問題行動のリストを作成して、これを指針とした生活史を書いてもらった。そして詳しい生活史を入手することの出来た少年スタンレーのその生活史を解釈するための統計や手紙、保護観察官の記録といった他の資料を収集した。一方で非行多発地域を示すドットマップを作成し、少年が暮らした3つの地区におもむいて、ショウの目にした情景を丹念に描いた。このように帰納的に、ショウは都市生活のなかで複雑に絡まり合う非行要因の究明してゆく。このようにして非行要因をふまえて更正のための具体的な「治療法」をさぐりだすのみならず、これを実践することにより少年は更生果たすのである。更正にいたるまでの経緯は、非行を深化させていった経緯と同様に、生活史の形をとって示された。このように、このモノグラフが逸脱という社会病理のいわば処方箋を提示したという点で、社会改良に結びついている。また社会的弱者の視座を重視している点も、シカゴ学派の第一世代から受け継がれた社会学者の態度である。

第三世代の一連のモノグラフの一つひとつは、ベッカーによれば、パークの指揮のもとになされた系統立った大規模な研究プロジェクトの一部である[20]。よって複数のモノグラフをひもとくことによって、シカゴの全体像をとらえることができるのである。

6 シカゴ学派の衰退

だがやがて「シカゴスタイル」と呼ばれた社会学上の方法はかつてほど重んじられなくなり、それに代わって新たなスタイルの社会学がアメリカ社会学の主流となる。戦後の「第二次シカゴ学派」の一人、ベッカーは1966年にそのような状況を嘆き、「今日我々の関心は、ローカルなエスノグラフィーからも、そしてある一つの地域や各部分やそれらの関連性についての知識の集積からも遠のいた。以前にもまして、抽象理論の構築が重視されている」と嘆いた[21]。同じく「第二次シカゴ学派」のストラウスも次のように述べている。「かつて支配的であった『社会学のシカゴスタイル』は、機能主義とサーヴェイ調査によって、影をひそめるようになった」と[22]。

このことはアメリカの社会変動と無関係ではない。すでにロシア革命および第一次世界大戦に参戦したアメリカには愛国主義的な空気が非常に強まっていたが、アカデミックな領域も例外ではなかった。シカゴ大学の内部においてさえも、かつての理想主義的な社会改革の風潮がかげりをみせ、社会調査のあり方にも変化がもたらされたのである。シカゴ学派のいわゆる「黄金時代」は1918年より30年代なかば頃までとされている。よって第一次世界大戦や大恐慌がすぐさまシカゴ学派の衰退を招いたとみることは難しい。しかし時代の圧力は、すでに1915年頃より影響を及ぼしていたのである。例えばスモールは1915年以降すでに政治的な活動を制限しており、アメリカが第一次大戦に参戦後は人によりつかなくなっただけでなく、やがては学生に対する指導態度も、用意したシラバスをただ読み上げるだけのものとなった。彼がそうしたのは保身のためであった[23]。またトーマスは1918年にシカゴ大学を辞めさせられているが、ディーガンによれば、この辞職には彼の妻の平和運動への参加が影響していたという[24]。

シカゴ大学におけるこうしたスタッフの移動は、トーマスの辞職にとどまるものではなかった。こうした人事は社会学部における方法論上の指導の変化をみる上での一つの指標となろう。ちょうど大恐慌の年に学長として迎えられたハッチンスがは高尚な思想 (high thoughts) と古典を好み、経験的な研究をあからさまに嫌った人物であった。だが最もシカゴ学派の衰退に影響を及ぼしたと考えられるのは、1934年にパークがシカゴ大学を辞め、フィスク大学に移籍したことであろう。シカゴ学派のその集団的な地域研究の求心力は、パークによってもたらされていたからであった。

同時に起こった複数の変化が、都市を実験室としてフィールドワークを行なったシカゴスタイルの衰退と関係している。これまで挙げた背景にさらに付け加えておくべき重要なことは、第一次大戦後から第二

次大戦後にかけて、アメリカが世界の大国となっていったことであろう。アメリカ社会の全体レベルの「秩序の問題」が浮上することによって、社会改革の勢力が衰えていったのである。シカゴ学派の都市研究は、ベッカーのメタファーにおいてはモザイクであり、彼によれば『ジャック・ローラー』を初めとする一つひとつの研究はシカゴというモザイク画を描く一ピースであるが[25]、急激な産業化が一定レベルに到達し、官僚組織が創設されて拡大すると、特定の地域をモザイクとしてあつかう研究よりも、今度は構造的な変数に注目することや機能的な分析に対するニーズが高まり、盛んとなっていったのである。こうして規範を志向し、社会の「秩序」維持に傾倒する理論や、量的にも対象を拡大して州レベルの、あるいは国家レベルの一般的傾向を把握する調査が社会学の主流となったのである。とはいえ、シカゴ大学の社会学者たちは、その全てではないにせよ、シカゴスタイルの伝統を継承した。第三世代で第二次大戦後もそのスタイルを継承した要となる重要な人物は、ワースとヒューズである。

7 おわりに

誰のためのそしてなんのための<知>か-このことによってこそ、いかなる方法が適切とされるのかが決まるといえよう。

社会学が科学の一部門である以上、理論も調査法も時代とともに直線的に進展し洗練されていくという考え方があろう。しかしその「進展」や「洗練」には社会情勢が大きく影響を及ぼしているのである。

すでにみたように、シカゴ学派が発足する以前から大恐慌までの都市化の時代には、急激な社会変動とそれがもたらす社会問題に、「アメリカ生まれのアメリカ人」が対応するための<知>を探究することが求められた。この頃は市井の人々を支持基盤とする宗教家たちが指導力を発揮することができたし、また社会学の世界においてもそうであった。社会をとらえるこの学派の視座や方法を最初に特徴づけたのは、主として宗教者の社会的良心であったということができる。

だがアメリカにおける支配層が都市化の進展とともに勢力を増し、シカゴ学派が用いてきた研究スタイルとは全く異なる視座や方法が注目され、評価されるようになった。なぜなら今度は、「価値自由」な自然科学をモデルとした〈知〉を求めることが社会学の支配的な情勢となったからである。シカゴ学派が一次影をひそめるのは、アカデミックなレベルにおいて劣っていたからではなかった。それは1960年代に公民権運動を初めとするリベラルな運動が盛んになり、政府に対する国民の不信感が高まってそれが大きな勢力となった時代に、この学派の調査スタイルが再び注目されるようになったことが物語っている。

ただし、フィールドワークを重視し、具体的な事例を根拠とした理論構築を目指す点において「初期シカゴ学派」と「セカンドシカゴスクール」とはシカゴ学派として一括りにできるけれども、マイノリティに向ける視座には大きな違いがある。前者は中産階級的価値観に立っており、例えば移民や黒人といった異文化マイノリティーのマジョリティーへの同化を目指していた26)。他方後者ではマイノリティーはマイノリティーのままで解放されることが目指され、マジョリティ集団の文化に対する批判のまなざしが向けられるようになった。この相違についての議論は別稿であらためてとりあげることとしたい。

<注>

1）ここでいうイデオロギーとは、特定の歴史的社会的基礎に制約された考え方の型のことである（『日本語大辞典』127頁）。

2）初期シカゴ学派第三世代のヒューズやワース、そしてブルーマーが第二次世界大戦後もこの学派の伝統を受け継ぎ、後の世代に継承している。よってこの学派の火が消えたというわけではない。しかし構造機能主義が1940年代にはアメリカ社会学において優勢を占めたのである。

3）ホーフスタッターによれば、スペンサーの著書のアメリカでの売り上げは、1860年の出版から1903年末まで37万冊近くにのぼり、この数は哲学や社会学といった分野の著作としては比肩するものはないとしている（ホーフスタッター『アメリカの社会進化思想』邦訳43頁）。

4）しかし意外に思われることであるが、スペンサー自身はダーウィン主義者ではなかった（バーカー

『イギリス政治思想・』堀 豊彦・仙 正夫訳76頁)。
5) この表は都留重人著『アメリカ思想史』を参考にした。
6) 南北戦争終結後から第一次世界大戦が始まるまでの間、アメリカ政府は移民の規制を行なわなかった。最もその数が多かったのは1907年であり、128万5000人が入国した。1910年には1334万5000人の移民一世がアメリカで暮らしていたけれども、これは全人口の約七分の一に相当する数字である。
7) 都留重人監修『アメリカ思想史』より引用
8) 宇賀 博 1990;p106
9) Addams, Jane 1895 p184
10) サムナーは宗教者であったけれども、進化論にふれたのち信仰心を失った。
11) ホーフスタッター1944 .訳書190頁
12) Small & Vincent 1894. p46
13) ホーフスタッター1944より引用。訳書192頁
14) Small & Vincent 1894.p77
15) Small 1895,p581
16)「実験室としての都市」という考え方は、パークに先立ち、スモールが1896年に"Scholarship and Social Agitation"という論文のなか(p581)で述べていた。
17) Small & Vincent 1894.p15
18) Park & Burgess 1969 (1921) v-vi
19)「自伝的ノート」『実験室としての都市』訳書10頁
20) ベッカー1966,訳書4頁
21) ベッカー1966、訳書6頁
22) Strauss, Anselm L. 1997 pp2-3
23) スモールは退屈で、長々とした、用意されたシラバスを準備し、それを一字一句読み上げた。彼が指導する学生になぜそうするのかを尋ねられ、次のように答えたという。「私自身を守り、講義で私が言ったことを証明するために、このシラバスを準備し、それをそのまま読み上げるのです。そうすれば、このシラバスは私が講義で何をいったかの証拠になります。唯一私が心から注意しなければならないのは、あなたたちが私に質問し、そこでそのとき答える必要性にせまられることなのです。答えるといっても実際に何を言えばよいのでしょうか。私はこの問題を成り行き任せにする事のできない状態に置かれているのです」(Deegan 1988,p82-3参照)。
24) Deegan 1988, p184
25) ベッカー1966,訳書5頁
26) 江渕は異文化適応研究についての詳細な考察に基づき、「シカゴ学派による移民の文化的適応過程に関する理論の骨子は、つまるところ、『同化』理論であったと言える」と述べている (1994,74頁)。

＜参考・引用文献＞

Addams, Jane
1895 "A Factor in the labor movement" Hull-House Maps and Papers by Residents of Hull-House . Thomas Y. Crowell & Co.pp183-204
バーカー、E
1954 『イギリス政治思想・』 堀 豊彦・仙 正夫訳 岩波現代新書
Beard, Charles A. & Beard Mary R.
1942 The American Spirit 『アメリカ精神の歴史』 高木八尺・松本重治訳 岩波現代叢書 1954
Becker, Howard
1966 "Introduction" in THE JACK-ROLLER by Shaw Clifford 玉井眞理子・池田 寛訳 『ジャック・ローラー』 1-19頁 東洋館出版社
ブルデュー、ピエール
1991 『社会学の社会学』 田原音和監訳 藤原書店

1991 『構造と実践』 石崎晴己訳 藤原書店
Coser, Lewis A.
1978 "American Trends" in A History of Sociological Analysis eds by Tom Bottomore and Robert Nisbet Basic Books
磯部卓三訳 『アメリカ社会学の形成』1981 アカデミア出版会
江渕一公
1994 『異文化間教育学序説』 九州大学出版会
ホーフスタッター、
、1944 『アメリカの社会進化思想』 後藤昭次訳 研究社出版
グールドナー、アルヴィン
1974 『社会学の再生を求めて』 岡田直之・田中義久訳 新曜社
Hammersley, Martyn
1989 The Dilemma of Qualitative Method- Herbert Blumer and the Chicago Tradition - Routledge
中村利昌
1990 「ジェーン・アダムス『ハルハウス』とシカゴ学派第1世代」 社会学論叢 No.109 pp74-87
梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉 篤義・日野原 重明監修
1989 日本語大辞典 講談社
パーク、ロバート
1986 『実験室としての都市-パーク社会学論文選』 町村敬志・好井裕明
御茶の水書房
清水幾太郎編
1970 『世界の名著 コント スペンサー』中央公論社
Shaw, Clifford
1930 THE JACK-ROLLER University of Chicago Press 玉井眞理子・池田 寛訳 1998 東洋館出版社
Small Albion & Vincent George
1894 The Introduction to the Study of Society American Book Company
Small Albion
1895 "Scholarship and Social Agitation" AJS vol.21.pp564-582
Strauss, Anselm L.
1997 Mirror & Masks Tramsaction Publishers
サムナー、ウィリアム他
1975 『社会進化論』 後藤昭次訳 研究社出版
玉井眞理子
1998 「『ジャック・ローラー』のライフヒストリー法」 玉井眞理子・池田 寛訳 『ジャック・ローラー』
pp329－345 東洋館出版社
都留重人監修
1950 『アメリカ思想史』 思想の科学研究会編 日本評論社
宇賀 博
1990 『アメリカ社会学思想史』 恒星社厚生閣
矢澤修二郎
1984 『現代アメリカ社会学史研究』 東京大学出版会

The Rise and Decline of Chicago School

TAMAI, Mariko

When we see the rise and decline of Chicago School been, we find that the perspective of sociological methods has been closely connected with social situation of the time. The method that Chicago School mainly used was ethnographic by which researchers tried to solue the problems that abrupt industrialization brought about. What we have to keep in mind is the industrialization caused by the laissez-faire economic policy of American government based on Spencer theory. The reason why people use the ethnographic method was because the method could approach the man/woman in the street or the social minorities who were neglected by the theory. The sociological stance was constructed by Albion Small (first generation of Chicago School) and bore fruit in the monographs of third generations, for example The Jack-Roller.

But soon the academic style of this School became marginal, and the cause of this marginalization was the change in social situation(rise of patriotism, entering first world war, and so on) .